

2021/3/29

(うとQ世話し ちょっと言訳)

昔むかしのそのむかし、自分が子供の頃、
学校では

「人間は万物の霊長」であるとか

「英知をもって健康で文化的な生活を送る存在」であるとかなんとか

「兎に角人間はすごいんだ」と教わり

家に帰ると

「起きて半畳寝て一畳」であるとか

「結局人は食っては出し、食っては出しの肉土管」

「最後の姿は髑髏(しゃれこうべ)」

とかの、都々逸みたいなことばかりを聞いて育ちました。

親父は旧帝大の法学部出身だったので、どちらかという上半分の様なことを言ってしかるべきなのですが、どうした訳か親父にしろ、叔父さんにしろ、お袋や婆さんに至るまで口をそろえていうのは、下半分のようなことばかりでございました。

かてて加えて、自分の周りというのは「都下」であるにも拘わらず「ド田舎」で、犬、猫は元より牛、馬、山羊、地鶏、土鳩やカラス、雀に始まって、小さいのは玉虫(便所虫)、ザリガニ、タニシ、蛙、バッタや、そのほかにもいろんな種類のトンボや訳の分らないド派手模様の蛾などがそこいら中にいて、何となく

「人間はその中の一種類なんだろうな」

位にしか思っておりませんでした。

兎に角周りは畑、田んぼ、里山、雑木林、朽ち果てた防空壕跡の洞穴みたいなものばかりでした。

夏休みの宿題と言え、毎年必ず、採ってきた「石ころの標本」とか「押し花にした標本」「虫の標本」ばかりを提出しておりました。

(今では残酷だと怒られるかもしれませんが)

余りに標本作りに夢中になりすぎて、一度など、あやまって「肥溜め」に落ちこちてしまったこともありました。

その後、1週間くらいは「わああ、くっせえ。寄るな、触るな、近寄るな。ええんがちょお、えんが、ちょ、肥溜め野郎」と囃し立てられて、誰も近づいてきませんでした。

そんな訳で、というかそのせいでと申しますか、自分は人間様とそれ以外のものの垣根が非常に曖昧でしたし、自分の所業なども考え合わせると「余り人間を偉い」とは思ってもおらず、将又(はたまた)且つ又そのせいで、我々人間を「普通の(普通に)生物の一種類としてみてしまう」癖がついてしまったようです。

之までの、自分の記事において、人に言わせると「人間を貶(おと)しめるような物言い」と取られるのは、そう言った自分生い立ち環境のせいかもしれません。

本日は之までの記事のいくつかに対する、
ほんの「ちょっとの言訳」
でございました。

(追記)

未筆ではございますが、自分は、本当は、こういうどうでもいい様な事を、だらだら、つら
つらと書くのが大好きなのだという事も、最後に併せて付け加えさせて戴いておきます。